The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人類学における知識の二元論と再一元化 ： 韓国朝鮮研究からの理論的鳥瞰
Author(s)	太田, 心平
Citation	年報人間科学. 2003, 24-1, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8136
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人類学における知識の二元論と再一元化

――韓国朝鮮研究からの理論的鳥瞰――

太田　心平

〈要旨〉

知識は「文化」の問題としてどのように扱われてき、今後どのように扱われていくのだろうか。

古典的な研究において人類学は、「未開人」の知識が西欧的な合理性に基づく知識へと進化する前段階にあるいう知識の一元論を論じた。この一元論がわずかな先見的論考や構造機能主義において批判され始め、知識に対する人類学の基本的な見解の主流は、文化相対主義の蔓延の中で、科学知識と民俗知識の二元論へ移行した。

これ以降の多くの人類学者にとって研究の対象となる知識はもっぱら民俗知識であり、民俗知識を尊重する社会的な風潮の中で人文社会科学界でも民俗知識の研究が礼賛されていった。他方で科学知識の研究は、STSの発達に支えられて脚光を浴びているが、人類学界においては長くにわたり著しく軽視されてきた。

近年には、この二元論を再一元化しようとする動きがある。この動きには、人類学者の研究結果が社会的制約を大きく受ける「虚実」でありながらも社会を変革する道具になってきたことを主として扱うものと、社会の一般大衆に認識された科学知識を在来の民俗科学と区別せずに研究対象へと組み込むものの二種類がある。本稿は、特に現代韓国と植民地期朝鮮について見られる研究動向から、特に後者の動きがこの分野で今後にいかなる可能性を持っているかを予備的に探索しようとするものである。

キーワード

科学知識、民俗知識、民衆的認識、ポスト・モダニズム、韓国朝鮮研究

「文化」とは、知識と深く関わりあったものである。「文化」を「知識の体系」[Keesing 1979: 15]と定義するまで行かずとも、多くの人類学者は象徴や意味が「文化」を構造的に構成する重要な要素だと考えており、その要素はふつう知識として社会でやり取りされている。よって、知識を扱うということは人類学者にとって不可避な作業となっている。

しかし、社会学に知識社会学があるのに対し、人類学には知識人類学という下位範疇がない。このことについてクリックは、文化人類学(以下「人類学」と表記)自体が知識を扱う学問であるため特別に知識を議論する下位範疇を作る必要などなく、むしろそれが危険な行為になりうると論じている。それでも彼は、個別の知識を離れメタな次元から知識というものそれ自体の問題を考え直すことの必要性を主張する[Crick 1982a: 287-288]。本稿も、この点でクリックの主張に同調し、先行研究において知識が「文化」の問題としてどのように扱われてきたのかを整理するものである。また、韓国朝鮮地域の研究において今後にこの分野がどのような可能性を持っているかを予備的に探索しようとするものでもある(1)。なお、知識を微視権力の道具と看取するフーコーの論述など、より広範囲な社会科学の諸研究がこの分野の先行研究において大きな位置を占めていることはもちろん分明であるが、既に多くのレビューや概説書が出ているこれらの議論は本稿の埒外とする。

本稿では、知識の中でも科学(的)知識と言われるものに着眼する。詳しくは次節で論じるが、人類学において知識が論じられる際には現地人の民俗知識と西欧人の科学知識とが対比的に捉えられ、民俗知識の方が客体化される傾向が強い。本稿は、この傾向が展開された過程と内包する問題を整理することが一つの重要な作業となるという立場、そしてその中では科学知識の方も等しく客体化される必要があるという立場で書かれており、整理の余地が比較的に多く残された科学知識に重点を置き議論を展開しようというものである。「科学」ということばは、一般的には自然科学を示すニュアンスが強い。人文社会科学に関して言及する場合には「学問」と言い換えた方が分かりやすい場合もあるだろうが、ここではこのことばをより広い学問領域に適用し、それらの全体を扱おうとする。

1　知識の二元論の展開：野生の思考と具体の科学

人類学は、「文化」を科学によって解明するものとして出発した(2)。進化論から影響を受けたタイラーやフレイザーなど草創期の人類学者たちは、「未開人」が依って立つ呪術などの「間違った考え方」が西欧人の「合理的な科学」へと進化するものだと考えた。つまりこの時点では、非合理的な知識体系と合理的なそれとが一元論的に把握されていたのである。

これに対し二〇世紀初盤にレヴィ＝ブリュールは、「未開人」が前面に押し出す「未開心性」の質的・量的な特徴をまとめ、それは科学的思考を通して「文明人」がものごとを知覚する場合の認識様式とは違っていることを論じた。この主張がエヴァンス＝プリチャー

ドやニーダムの共感を呼び[吉田 1994]、人類学には民俗知識と科学知識とでも呼び分けられるべき二元論が根付いてきた(3)。

例えばダグラスの場合は、未開人の汚れとタブーの概念の説明を文明人の衛生学や倫理学や美学で解釈してみても論理的に「説明不十分」だったり「間違っている」結果しか導き出せないことを例証しつつ、一次資料に寄り添うことを通して、人々を支配する構造的概念にその原因を求めている[Douglas 1966: 42-58](4)。彼女は、中心的な事例としたアフリカの汚れやタブーの分析を現代の文明化社会にも敷衍することを目指しており[Douglas 1986: ix]、文明人も「未開心性」を持っているということを示そうとする点でレヴィ=ブリュールと立場を同じくしている。しかし彼女もまた、民俗知識と科学知識が別の体系であるという考え方に立って、このような具体的な事例を実践的に描写・分析・解釈するに至っている。

この二元論を更に強く宣言したのが、一九六〇年に公刊されたレヴィ=ストロースの「具体の科学」だった。彼は、エヴァンズ=プリチャードの「妖術論」やユベールとモースの「呪術の一般理論の素描」を引きながら、民俗知識と本稿で呼ぶものが「科学という別の体系とは独立している」ことを論じた[レヴィ=ストロース 1976: 14-18]。その中で彼は、民俗知識は「限度のある材料を用いて自分の考えを表現する」点で「ブリコラージュ(器用仕事)」に似ているが、その点を差し引いて考えれば「近代科学と同様に学問的である」とする。彼は民俗知識と科学知識のこの決定的な差異に着目し、両者の権威者ないし実践的行為者である「ブリコルール(器用人)」と「科学者」の仕事ぶりを比較することにより、両者の違いを追求している[レヴィ=ストロース 1976: 22-41]。

文化相対主義が台頭し進化論が否定されていく中で、このようにして人類学では西欧の合理的な思考と科学的な知識が相対化されていった。文化相対主義は「他者の信仰と実践はそれが属する特定の文化の観点から見る時にもっとも理解されやすいという観念」[Ito-Adler 1997: 98]であったが、これは「文化」間の共約不可能性を強調するという論理的に妥当な結果を生んだだけではなく、原義を越えて蔓延していく中で西欧vs非西欧という不可解な対立構図までをも作り上げた[Spiro 1992: 62-67]。これに従い知識も二元化されていったと言える。

2 民俗知識研究の高揚: 解釈人類学と開発の研究

バーンスタインは、未開社会に関しウィンチが発表した一九六四年の論考を例に、相対主義が客観主義との均衡を抜け出して単独で脚光を浴び、「知識や合理性に関する実証主義的なモデルを攻撃する」という形で表出したことを論じつつ、知識の二元化に関する人文社会科学界の歴史的鳥瞰を示している[バーンスタイン 1990: 54]。彼が言うように、知識の二元論は合理性に対する攻撃として具現化されてゆき、これ以降の人類学的研究においては科学知識より民俗知識の研究が発展してきた。この発展を先導した諸分野の中から、特徴的な二つの例として、ここでは開発研究と解釈人類学の「うわべ」

を比べてみる。

学界で高まっていた文化相対主義への警戒意識を批判したギアツ[Geertz 1984]は、人類学者が社会のメカニズムを説明する科学者であるよりもむしろ現地社会に内包された象徴的意味を解釈する文芸家であるべきだと論じつつ[Ito-Adler 1997: 98]、「法則と一般概念を探す」西欧合理主義と現地の知識の解釈過程とを明確に区別し[Levi 1992: 100-102]、知識の二元論を顕著に踏襲していった。反面で彼はほぼ同時に、「現地人の視点から」ものを見ることを人類学者の課題としている[Geertz 1983: 56]が、ここから導かれるギアツの立場は、人類学の研究対象がただ民俗知識のみにあるというもので、科学知識の方はほとんど眼中に置かないというものだった(5)。

一方で開発研究もまた、科学知識と民俗知識の二元論を論じてきた。「科学は現代に生きる人間の想像力に大きな影響を与えてきたが、その(中略)一つの大きな要因は、科学が開発と密接な関係にあったことである」[Alvares 1995: 221]ため、近代科学を論じることは開発研究の重要な一分野となった。しかしその中においては、近代科学の知識を用いて開発を主導することが「知識・生産領域に対する民衆の権利を奪う主要な手段」だと蔑まれ、「科学は、知識を拡大する手段としてではなく、知の事業の目的にかなうまっすぐで狭い道の中に知識を、つまり人間の行動を、植民地化し管理する手段として批判的に捉えられるべき」[Alvares 1995: 229-230]だとまで言われるようになった。これを立証するかのように、多くの開発プロジェクトに関する研究が科学知識の不完全さを結論に含めている[ex. Shiva 1991; Richards 1985]。こうして科学は唯一のパラダイムではなくなり、民俗知識の価値は高まった。それと同時に、科学知識により主導される「上からの開発モデル」の代案として、「現地の知識(indigenous knowledge)」や「民俗知識(folk knowledge)」をキーワードとし、現地人を「主体」に据えた「アクター・オリエンティッド・アプローチ」が叫ばれるに至った[Long 1992]。

こうしてこれらの二分野は民俗知識の研究熱を高めるのに一役かってきた。この点において、解釈人類学と開発研究の展開過程には相当部分で共通点があることとなる。逆に言えばもちろん、この二分野を含む社会科学全体が相互作用しあって知識の二元論をソフィスティケートし、民俗知識の研究を重んじてきた結果が、現在の状況なのである。結果として、「科学と文化は、二〇世紀の世界において、もっとも大きな力で世界を支配し、あらゆるものを説明し、その存在を正当化してきた二大パラダイムだ」[宮武 2000: 9]と言われるように、民俗知識は科学知識と並ぶパラダイムにまで格上げされた。

しかし、両者の別の側面には重要な差異が看守できる。「ローカル・ノレッジ」の「厚い記述」[Geertz 1973]という目的を持つギアツの解釈人類学が「そこにあるもの」を可能な限りそのまま描写しようとするのに対し、「持続可能」で効果的な開発に与することを目指す開発研究は違った作業を行わざるを得ない。学術研究が生み出す知識には「理解のための知識」と「行為のための知識」があるが[Long 1992: 3]、開発研究は開発のコンテキストをつかみ問題を明

確にするために調査を単純化し凝縮し[Long 1992: 7]、「行為のための知識」を生産することにより多くの神経を使う分野である。この学術研究の二種類の作業は「描写的(descriptive)」説明と「処方的(prescriptive)」説明とも言い換えられるが、問題を理解するための綿密な「描写的」説明よりも早く実利に結び付く「処方的」説明の方が開発政策の意志決定過程において歓迎される[Apthorpe 1997]。

つまり民俗知識研究は、社会状況についてのありのままの描写と有用的な処方という、まったく正反対の性質を持つ研究動向の不思議な結託により高揚してきた部分があったと言えるのである。

3　科学の民族誌の登場:西欧的合理主義の野蛮さ

一方、唯一のパラダイムではなくなったばかりではなく、時に逆差別の対象として軽視され始めた科学知識は、その「野蛮さ」が「発見」されたお陰で、むしろ特殊な研究分野に拾われていった。「STS(Science, Technology and Society)」と呼ばれる研究分野である。人類学者は「「未開人」の推論は研究するが、現代人の知識を扱う者はほとんどいない」ため、STSの中にほとんどいないとされている[ラトゥール 1999:28]。だが、科学者や技術者の跡を追って彼(女)らの活動を記述する作業は「民族誌的」だと受け止められることがあるため、STSの研究成果は時どき「科学の民族誌」と呼ばれている。本節では、人類学の本流である民俗知識の研究から離れ、二元化されたもう一方の知識の研究動向に若干ながら触れておく。本筋の論旨から少し逸れるように感じられるかもしれないが、これは次節で示す新しい動きを説明するための必要な前提だからである。

例えばラトゥールの場合、STSにおける彼の仕事は科学の「ブラック・ボックス」を開けることにあるという。科学知識や技術の創造には論争的な歴史・複雑な内部・商業性・人脈などの非合理的な部分が深く関与するが、科学知識や技術が創造された後には原因と結果のみが重視されるので、それら非合理的な部分は知られもせず、言わば「ブラック・ボックス」の中に封じ込められる[ラトゥール 1999:4-5]。彼はその考えに基づいて、例えばDNAの二重らせん構造が発見された過程が、(社会文化的な)法則と彼が呼ぶものに支配されていることを示している。

このように、科学知識すらも社会集団間の対立と交渉の結果として社会的に構成されるもの[クーン 1971]であり、その点では民俗知識と決定的な違いはないと考えることが出来る。科学の民族誌は、(多少スキャンダラスな)衝撃を社会にもたらすことで、この考え方の拡大に大きく寄与した。しかしその反面で、自然科学に対する人文社会科学の介入に対しては、「制度化された科学やテクノロジーへの参与は、異なった世界への想像力や批判精神を、制約してしまう可能性がある」とか、「科学やテクノロジー、あるいは人類学を受け入れるべきかどうかが問題になった場合のように、内部矛盾を増大させる可能性がある」[宮武 2000: 198]という批判[Downey et al. 1995]が浴びせられたり、人文社会科学に対する自然科学の介入に

対しては、もっと単純に「ラブレターの文法の間違いを直す無粋な科学者先生」という批判[ソーカル&ブリクモン 2000: v]が寄せられたりもしてもいる。特に、アメリカのカルチュラル・スタディーズ誌にナンセンスなパロディー論文[Sokal 1996a]を投稿し掲載させたことでこの分野の研究者たちがテキストの作成・読解・引用においてロー・レベルであることを「実証」した物理学者ソーカルの「悪戯」(6)により、このような批判が盛んに横行することとなり、「サイエンス・ウォーズ」と呼ばれる事態が発生した[金森 1998a; 1998b]。この事態は人類学的研究にも波紋を及ぼしている[Fujimura 1998; Idem 1999; Fuller 1999]が、その実情には、誤解が敵意を生み、厚意が反撃を呼んでいる点も多く見られる[ソーカル&ブリクモン 2000: v-xxii]。

科学の民族誌には、「純粋な科学」はあるかという大命題が掛けられてもいる。「ブラック・ボックス」を開く作業にせよ、「ラブレターの文法の間違いを直す」作業にせよ、それらの作業は、「サイエンス・ウォーズ」という「文化」を作っているだけであるとも考えられ、DNAの二重らせん構造の発見過程より優る点など持ち得ないのかもしれない。「科学者の科学」は、一つの「文化システム」となり、科学界という「現地」における「ローカル・ノレッジ」と見ることも可能となっている。あるいは、当の科学者にとってさえ専攻外の学問領域が、異質な別世界として、理解すべき客体となるようになっている[Terrell 2001: 808]。こういう状況を呈する限り、科学は解釈人類学に取り込みうるだろうと、近年のギアツは考えているという[Geertz 2000: xii]。

4　主客一元論の可能性: 韓国朝鮮研究の事例から

ここまでは、民俗知識と科学知識が二元化されてきた過程を整理し、その両者が別々の場で別々の人々によって探求されてきたことを示してきた。同時に、これらの過程や探求が、合理的ではないという意味で偶発的な側面を持っていたことも指摘できた。というのも、二元化の過程は、文化進化論から構造機能主義の人類学への移行や文化相対主義の蔓延という、まったく別の諸問題に導かれていた部分があった。民俗知識研究は、社会状況についてのありのままの描写と有用的な処方という、まったく正反対の性質を持つ研究動向の不可思議な結託により高揚している部分があった。科学の民族誌は、サイエンス・ウォーズに動機づけられている部分があった。

本節では、知識というものを一元論へと回帰させる可能性について論じつつ、韓国朝鮮地域の研究動向の一部を具体的な例として整理する。ここで紹介する諸研究も、知識の二元論がたどってきたような偶発性と無関係だとは、もちろん言えない。だが、知識の二元論が人類学に必要不可欠なものではないことを、これらは実践的に訴えかけている。しかもこれらが知識を一元論へ回帰させる上で取る方法は、上で紹介したギアツのそれとは別のものとなっている。

科学の民族誌は、人類学史という分野を媒介として人類学分野における諸研究にも広く登場している。ストッキングやインゴールド

らの人類学史研究については言うまでもなく、過去の人類学者が論争し主張し記述したことの「ブラック・ボックス」を開こうとする作業も、一部の人類学者の主たる研究課題となって既に久しい(7)。また、「文化」がア・プリオリとして存在するものではなく、それを書く側の姿勢やテキスト戦略により違った顔を見せるという考え方が主流を占めるようになり、民族誌の登場人物として現地に隠れていたもう一人の登場人物、すなわち調査者が話の前提に引き出されることも多くなった(8)。

ポスト・モダンの研究姿勢は、多様な分野で知識を再び一元化しようという時代的潮流を起こしてきた。現象には研究対象だけではなく研究者自身が影響を及ぼしているという考え方が登場してきた。例えば日本の霊長類学者や動物行動学者たちは、サルの個体一匹一匹に人間と同じ名称を与えてサルと人間を一元化しつつ、サル社会に参与していく自らを意識することによって革新的な成果を挙げた、と評価され始めた。物理学者は、原子や素粒子を観察する際に研究者と研究対象とが互いに何らかの相互作用を行っているという指摘を行った[寺元 2001: 18-19]。これらの考え方の共通点は、研究の主体たる科学者と客体たる対象とを同じ地平の上に扱い、同時に、研究成果を分析し科学知識を生成する主体に過ぎなかった科学者たちが研究の客体に影響するファクターであることを意識する、つまり科学の主客同一化を志向する点にある。

科学知識の生成の主体と客体をめぐるこのような新しい主客一元論の台頭は、前後して蔓延したポスト・モダニズムとも同調し、直接的ないし間接的に人類学分野の研究者たちの考え方に影響をもたらした。あるいは、同様な知の歴史的背景を持つ読者たちに反映し、無意識的にしろ知識の主客同一化を図ろうとする研究者やその研究成果への評価を高めた。そして、相互に正反対の方向性を持つ二つの動きが登場する。これらは、知識の二元論を超えようとするものである点において共通した背景から出発しているとも言えるが、根本的な思考様式としてはまったく反対の結果を目指すものである。

4.1 人類学における知識の再一元化（一）

第一の動きは、学者たちが行う人類学的研究が、特定の政府の利権や政策に反映され、その社会を上から変えていくことを論じようとするものである。ここでは、開発研究が批判する「上からの開発モデル」が実社会では数多く行われてきたということが前提になり、その政策に人類学的な調査や報告や提案がどのように連関しているかが明らかにされようとしている[ex. Crick 1982b]。これは、科学の民族誌とは違い、人類学者が自らの研究対象に働きかけ、時には彼(女)らの「文化」を想像し、創り出すまでに至ることを指摘するものである。

この動きは特に植民地研究で顕著だ。植民地の統治と経営には宗主国による多様な政策が必要となるが、人類学はそこに寄与するものとして宗主国側に歓迎された(9)。その実体を暴くということが一九六〇年代後半から「人類学をめぐる問題提起」という形で活発に行われるようになった[宮沼 1976: 276]ことで、植民地期の人類学的

研究は「純粋な科学」の楽園から追放された。この後に人類学は植民地状況を研究するのではなく植民地状況を作り出すもの[森 1995]としても研究の対象となり、科学知識の主客の壁は崩されることとなった。

この動きに同調する研究例について更に地域という限定を設けて具体的に示すなら、植民地期朝鮮の研究においては、過去の人類学者の活動を人類学の研究対象にするという傾向が近年に特に活発化している。他分野の研究者たちが日本の植民地を扱う研究[ex. 駒込 1996; 小熊 1998; 中生 編 2000]により高い評価を受けていることが、韓国朝鮮研究者にも刺激を与えている。民俗研究を人類学するという課題に取り組む南根祐や林慶澤や崔吉城は、秋葉隆[崔 2000]・今村鞆[南 2001; 林慶澤 2002]・村山智順[南 2001]・宋錫夏[南根祐 2002]・崔南善[南 2003]と、後日の民俗学と人類学に影響を与えた民俗研究家たちの研究活動の秘話と「ブラック・ボックス」を紐解きつつ、彼らの研究が時代的背景や政治的圧力によって作られてきたことを指摘する。金容徳や全京秀は、朝鮮および東北アジアの研究の本拠地としての役割を担った京城帝国大学の存在や、そこに勤務した学者たちの朝鮮総督府の職員としての立場についての研究を続けている[金容徳 2002; 全 2003]。同じく全や崔錫榮は、もう一つの学術センターとしての博物館の存在に注目し、朝鮮総督府博物館を中心に日本の文化政策においてそれが担った役割を暴く作業を行っている[全 1999; 崔錫榮 2001][10]。話の主人公たる科学者の権威は、この分野の研究者たちには通用しない。科学者は、むしろ社会の一員として、時には著しく他者化され、記述される。

4.2 人類学における知識の再一元化（二）

植民地研究における以上の動きを「過去の人類学的研究を歴史化する方向」を持つものと表現するなら、植民地研究にはもう一つ、「調査対象の植民地経験を民族誌の主題にする方向」を有し、植民地や元植民地で発生した一般的に非合理な文化現象を植民地状況に位置づけ、植民地化された人びとの「主体」的な抵抗の形態であると見なすジャンルがある[栗本・井野瀬 1999: 19]。この植民地研究の二つ目の方向と同じく、科学知識の主客同一化に関しても、一般の人々が持つ科学知識を題材としようとする動きがある。

話は前後するが、民俗知識の研究には知識そのものを論じた研究も少数ながらある。クリックと同じく「知識人類学」ということばを使うバースは、東南アジアとメラネシアにおける「伝統」的な師弟関係をその間でやり取りされる知識と関連づけて描写し、それが「文化」と呼ばれるものの形成に果たす役割を論じている[Barth 1989]。同じく「知識人類学」ということばを使う渡邊[渡邊 1990]は、沖縄における民俗知識の社会的配分状況に着目し、全てを知っている（「全知」）・部分しか知らない（「部知」）・まったく知らない（「無知」）・間違って知っている（「偽知」）という知識の成層性と、「偽知」が「全知」に変化する過程がありうることを論じる[渡邊 1986]。渡邊はここで人々が持つ知識が互いに矛盾することがありえることを示しているが、小田はここから更に知識が「全知」として

正当化される過程について渡邊とは異なる論考を行っている［小田 1987］。中川は、伝えれば知識の所有権が伝えられた者へ移行するという特殊な状況とそこで取引される民俗知識を紹介し、それを人類学における交換や贈与の問題として解釈する可能性を示している［中川 1989］。これらは、知識を持つ者が社会に対して有する権威や正統性を主題にするという特徴で括ることが出来る[11]。これらの研究が扱う知識は、権威と正統性が顕著に介在する点で、人類学において「常識」として論じられるものとは異なっている。

これらの研究で論じられている民俗知識と同様に、科学知識も社会において権威や正統性を人々に付与する性質を持っている。しかも、二〇世紀には科学の社会に対するインパクトは加速度的に増大し［村上 2002: 255］、社会には「科学技術主義とでもいうべき一種のイデオロギー」が広がった。そしてこのイデオロギーと上で見た「御用学者」の存在とが、互いに「生み出し正当化する」という関係を維持しつつ、科学者の権威を一般大衆に浸透させてきた［広重・伊藤 2002: 269］。よって科学者や技術者や知識人たちが、一般大衆の「師」や「全知」の所在となることが増えてきたのである。

もちろん科学者の科学と一般人の科学には、たとえ出所が同じであっても大きな違いがあることが多い。科学知識が印刷されたテキストによって媒介される場合には、「民衆的読み方」が深く介入して、著者の意図が歪曲されることが多い［Chartier 1989: 161］からである。しかしこの「民衆的読み方」は、科学者同士の間にも看守できる［Terrell 2001: 811］。またこのことは、科学知識がことばにより媒介される場合や、それらが一般大衆の間で再生産されていく過程にも同様に見られる［太田 2002a］。むしろ社会において科学知識には、歪曲という文化的装置が用意されている。

ブルアによれば、科学知識のこの性質は、「科学に対する不可解な態度は、科学が聖なるもの、そしてそれ自体何か恭しくて近づき難いものとして扱われていると考えると、説明可能」［ブルア 1985: 65］[12]だという。ここにおいて科学は宗教に置換可能な形で言い表わされているが、実際に科学は宗教やイデオロギーと並立されるシステムとして人々の間に生きていることがある［太田 2002b］。次のような例もこの点を示している。

社会参与に積極的な韓国のある教会は、一九九七年のある行事に際して参加した構成員たちにある記念品を配布した。これは、韓国のキリスト教徒の家によく見られる木製のプレートで、「皆に福音と平安を」と書かれている。受け取った者たちは、筆者が確認した限りで全員が、自宅のマンション内で玄関ドアの上にあたる壁にこれを飾っていた。この場所に飾る理由を尋ねると、彼(女)らは以下の中から二～四通りの内容を併用して語った。（一）聖書が門の内と外について多く言及している[13]から（ないし「牧師様」がそう説いたから）、（二）異なる階級の人々と家の外で活動する時のモットーを確認するため（ないし運動家の「〇〇さん」がそう弁じたから）、（三）そこに飾るのが美観上でもっとも良いから（ないし家庭講座で「先生様」がそう評していたから）、（四）もともとそこに飾るものだから（ないし「姑」がそう言っていたから）、（五）電磁波を防いでく

れるから（ないしテレビで「教授様」がそう教えたから）[14]。最後の理由は、家の内部を木製の家具で囲むと「体に悪い」電磁波が家に入ってくるのを防いでくれるという考えに基づくもので、他の壁面とは違って木製の家具を置けない場所がそこだという理由に因るものだという。少なくともこのような場合において、宗教やイデオロギーや芸術や常識という文化システムと並んで、科学ないし（歪曲された民衆的な）科学知識が、人々の考え方に解釈の体系の一つとして存在することを例示できる。

このような場合の科学知識というものを考える時には、それと民俗知識とを明確に分離する必要性を感じ難い。この点に着目して植民地期朝鮮の社会状況を見直すなら、そこでは知識人による科学知識の受容と抵抗の歴史があり、それが解放後の韓国まで続く「民族文化」の想像をもたらした［金光憶 1998］ことが挙げられる。朝鮮が日帝の植民地となる前から日本人の学者たちによって続けられていた（「ブラック・ボックス」を多く含む）慣習調査の研究成果を慣習法としてまとめた韓国の家族法は、「伝統」の規範として一般大衆に受容され、現在でも家内の規律や相続などの正統性と正当性を示す根拠となっている［ヤン・ヒョナ 1995］。植民地下で日帝や朝鮮の民族系組織によって宣伝された粉ミルクなどによる新しい幼児養育法は、一般大衆による科学知識の礼賛により日帝の権力とは無関係に社会に広がり、韓国における育児の「文化」を刷新した［キム・ヘギョン 1997］。喫煙に関する科学知識の流布は、喫煙と疾病の関係についての社会的な考え方を一新し、喫煙をタブー視される地位に女性を置き、韓国朝鮮の女性の「伝統」的な理想像を創り上げた［高韓那 2003］。科学知識は民俗知識と特に区別されることなく人々の行為を左右したり[15]、「慣習」や「伝統」や「民族文化」の想像を通して民俗知識そのものを創り上げていったりする。後者の場合には特に、科学知識が社会に「文化」を発信する道具になっていると言える。

つまり、第一の動きが研究対象に制度的に働きかけ研究対象そのものを変えていく即効性勢力の主役として科学者を論じるのに対し、この第二の動きにおいて科学者は研究対象に対し思想的に働きかける遅効性勢力の脇役として人類学的研究に登場することとなる。第一の動きと第二の動きを合わせた試みと言えるものもある。鈴木は、韓国社会が男性的な儒教と女性的な巫俗の二重構造により成り立っているとした秋葉隆の学説が、その「ブラック・ボックス」の部分を意識されないまま、後発の研究者や知識人たちによって韓国の女性を不必要なまでに巫俗と結び付ける根拠となってきたことを批判している［鈴木 2001］。三ツ井は、いわゆる「日朝同祖説」が大部分の学者たちの反対にも関わらず政治経済的な圧力によりア・プリオリとなり、一般大衆の認識にまで浸透してきたことを示している［三ツ井 1999］。

この第二の動きによれば、科学知識は科学者たちだけの所有物ではない。知識人と呼ばれる人々、「もの知り」と呼ばれる人々、そしてそのどちらとも呼ばれない人々でも、科学を語ることはある[16]。科学の所有権は、万人の手にすらその一部があり、かつ科学者にす

らその全部はないのである。

注

(1) 本稿の執筆にあたり御指導・御助言を頂いた本学の小泉潤二先生とソウル大学校人類学科の大学院生諸氏、および御支援を頂いた大韓民国国際教育振興院に謝意を申し上げたい。

(2) 一八七一年に出版されたタイラーの『原始文化』の第一巻第一章は、「文化の科学」と題されている[Tylor 1871]。一九二二年に出版されたマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』の序文にも、科学的訓練を受けた人類学者が科学的な調査を行うことが謳われている[Malinowski 1922]。

(3) なお二元論の立場から過去の一元論を批判する研究は、一九五〇～六〇年代に多く見られる。この頃にこの種の転換期があったことが、カーゴ・カルト研究[春日 1997: 129-130]などでも述べられている。

(4) 彼女に依れば、人々は不完全なカテゴライズに基づいて世界を認識しており、汚れやタブーに関わるものごとは彼女らのカテゴライズ方法では処理できない、つまり宇宙観の根底を覆してしまうものごとであるという。

(5) もちろんこれはギアツ個人の研究姿勢、ないしはむしろギアツィアンたちの誇張[Levi 1992: 104]に過ぎないが、それらは人類学者たちへの「強制命令」[時安 1995]と誤解される傾向がある。

(6) この「悪戯」については、ソーカル自身が反響や追記を随時発表していった[Sokal 1996b; Idem 1996c; Idem 1997a; Idem 1997b; Idem 1998; ソーカル&ブリクモン 2000]。

(7) 例えば、アメリカの社会言語学が人類学と言語学の間でどのように発展してきたかを論じる[Murray 1988]においては、「純粋な科学」よりも学者間の権力関係や研究費の出所などが優先的に論じられている。

(8) この考え方は、隠されていた登場人物に「デイアス・エクス・マキナ(deus ex machina)」を演じさることを嫌うポスト・モダン文学と同調しているとの指摘も出来る。

(9) 人類学における植民地研究の多くは文化統治という形態で人類学が利用されていたことにしか言及しないが、特に形質人類学者たちが「土人の戦闘力調査」などの名目で宗主国側に寄与していたことをはじめとして、武断統治についても同様のことが指摘できる[全 2003]。

(10) これらの研究の中には、語りえなかった過去の状況を研究の自由が補償された時代に整理しなおそうというものもある他方で、整理者のイデオロギーが先行したものや、証拠が明らかに不足したもの、論理的妥当性を著しく欠いたものなど、問題を持つものも多く見られる。

(11) 小池は、現地から知識を得てくる人類学者の調査方法やその時代的な行き詰まりを検討するという点で、知識に関するこれらの人類学的研究について、本稿とはまったく違ったレビューを発表している[小池 1991]。

(12) [宮武 2000: 73]より二重引用。

(13) 例えば以下の部分に見られる。「だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。したがって、わたしたちも、彼のはずかしめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか。」(ヘブル人への手紙13:12～13)

(14) ただしこれらの各呼称は韓国語の直訳である。

(15) これに類する研究としてハーパーは、チェルノブイリの原発事故

に接したハンガリーの一般大衆が民衆化した科学知識に左右されて行動する様相を人類学的に研究している[Harper 2001]。ウィリアムズによれば、草原についてモンゴルの人々が持つ民俗知識と科学者がモンゴル平原を論じる科学知識との間には明確な線引きが不可能だ[Williams 2000]。

(16) 第二の動きの問題点は、科学知識を作り出したり広めたりする「主体」が第一の動きよりも更に不明確になりがちであり、そのために近代化や植民地化をめぐるマクロな言説と科学知識との線引きが曖昧になりがちである点にある。「主体」を明らかにすることは必ずしも必要な作業だとは言えず、また科学知識は近代化や植民地化と必ずしも重なるものではないが、本稿で紹介した先行研究がこれらの問題に積極的に応えるものでないことも事実である。

参考文献

【日本語】

太田心平 2002a「〈新自由主義〉: 韓国のある教会に見た悪徳づくりの過程とその影響」,『年報人間科学』23(1): 95-114.

―― 2002b「韓国キリスト教労働運動の多面性: 教会構成員の組織内アイデンティティと権威の問題から」,『韓国朝鮮の文化と社会』1: 129-168.

小熊英二 1998『〈日本人〉の境界: 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』, 新曜社.

小田亮 1987「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分: 沖縄本島北部・塩屋の事例考察」,『民族学研究』51(4), 334-374.

春日直樹 1997「「発端の闇」としての植民地: カーゴ・カルトはなぜ「狂気」だったか」, 山下晋司・山本真鳥 編『植民地主義と文化: 人類学のパースペクティヴ』: 128-151, 新曜社.

金森修 1998a「サイエンス・ウォーズ(前半)」,『現代思想』26-8: 16-42.

―― 1998b「サイエンス・ウォーズ(後半)」,『現代思想』26-10: 8-27.

クーン, トーマス 1971『科学革命の構造』(中山茂 訳), みすず書房.

栗本英世・井野瀬久美恵 1999「序論: 植民地経験の諸相」, 栗本・井野瀬 編『植民地経験: 人類学と歴史学からのアプローチ』: 11-46, 人文書院.

小池誠 1991「知識の社会人類学」,『社会人類学年報』16: 193-208.

駒込武 1996『植民地帝国日本の文化統合』, 岩波書店.

鈴木文子 2001「韓国の儀礼におけるジェンダー再考: 村祭の二重構造論を中心に」,『HIROSHIMA SYMPOSIUM & SHIMANE WORKSHOP』: 85-90, 比較民俗学会(非売品).

ソーカル, アラン & ブリクモン, ジャン 2000『「知」の欺瞞: ポストモダン思想における科学の濫用』(田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹 訳), 岩波書店.

崔吉城 2000「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」, 中生勝美 編『植民地人類学の展望』, 風響社: 171-210.

全京秀 1999「韓国博物館史における表象の政治人類学」,『国立民族学博物館研究報告』24-2: 247-290.

―― 2003「植民と戦争の日帝人類学: 台湾帝大と京城帝大の人脈と活動を中心に」(太田心平 訳),『思想』(近刊).

寺本義也 2001「知の神秘と科学序論」, 寺本 編『知の神秘と科学』: 7-23, 新評社.

時安邦治 1995「異文化理解の解釈学的アプローチと文化記述の今後の課題: クリフォード・ギアツの文化解釈学を手掛かりに」,『年報人間科学』16.

中生勝美 編 2000『植民地人類学の展望』, 風響社.

中川敏 1989「インドネシア, エンデ族における知識の経済学」, 吉田禎吾 編『異文化の解読』, 平河出版社.

南根祐 2001「「朝鮮民俗学」と植民地主義: 今村鞆と村山智順の場合」, 筑波大学民俗学研究室 編『心意と信仰の民俗』, 吉川弘文館: 32-54.
—— 2003「檀君ユートピアの虚実: 崔南善の場合を中心に」,『仏教大学総合研究所紀要』別冊, (印刷中).
三ツ井崇 1999「日本語朝鮮語同系論の政治性をめぐる諸様相: 金沢庄三郎の言語思想と朝鮮支配イデオロギーとの連動性に関する一考察」,『朝鮮史研究会論文集』37: 133-169.
宮武公夫 2000『テクノロジーの人類学』, 岩波書店.
バーンスタイン, リチャード・J 1990『科学・解釈学・実践: 客観主義と相対主義を超えて』(世山高司・木岡伸夫・品川哲彦・水谷雅彦 訳), 岩波書店.
広重徹・伊藤俊太郎 2002「現代文明と科学」, 伊藤俊太郎・広重徹・村上陽一郎『思想史のなかの科学』, 平凡社: 267-278.
ブルア, デイヴィド 1985『数学の社会学: 知識と社会表象』, 培風館.
宮治一雄 1976「訳者あとがき」, G・ルクレール『人類学と植民地主義』(宮治一雄・美江子 訳), 平凡社: 275-285.
村上陽一郎 2002「自然科学を中心とする学問の再編」, 伊藤俊太郎・広重徹・村上陽一郎 前掲書: 255-266.
森雅雄 1995「英国社会人類学と間接統治」, 合田濤・大塚和夫 編『民族誌の現在: 近代・開発・他者』, 弘文堂.
吉田禎吾 1994「リュシアン・レヴィ=ブリュール『未開社会の思惟』」, 綾部恒雄 編『文化人類学の名著50』: 68-76, 平凡社.
ラトゥール, ブルーノ 1999『科学が作られているとき: 人類学的考察』(川崎勝・高田紀代志 訳), 産業図書.
レヴィ=ストロース, クロード 1976『野生の思考』(大橋保夫訳), みすず書房.
渡邊欣雄 1986「民俗的知識の動態的研究: 沖縄の象徴的世界再考」,『国立民族学博物館研究報告』別冊3: 1-36.
—— 1990『民俗知識論の課題: 沖縄の知識人類学』, 凱風社.

【英 語】

Alvares, Claude 1995 "Science," in W. Sachs (ed.), *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, Zed Books: 219-232.
Apthorpe, Raymond 1997 "Writing Development Policy and Policy Analysis Plain or Clear," in C. Shore and S. Wright (eds.), *Anthropology of Policy: Critical Perspectives on Governance and Power*, Routledge: 43-58.
Barth, Fredrik 1989 "The Guru and the Conjurer: Transactions in Knowledge and the Shaping of Culture in Southeast Asia and Melanesia," *Man* (N.S.) 25: 640-653.
Chartier, Roger 1989 "Texts, Printings, Readings," in L. Hunt (ed.), *The New Cultural History*, University of California Press: 154-175.
Crick, Malcolm R. 1982a "Anthropology of Knowledge," *Annual Review of Anthropology* 11: 287-313.
—— 1982b "Anthropological Field Research, Meaning Creation and Knowledge Construction," in D. Parkin (ed.), *Semantic Anthropology*, Academic Press.
Douglas, Mary 1966 *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*, Preger Pub..
—— 1986 *How Institutions Think*, Syracuse University Press.
Fujimura, Joan H. 1998 "Authorizing Knowledge in Science and Anthropology," *American Anthropologist* 100 (2): 347-360.
—— 1999 "Authorizing Science Studies and Anthropology," *American Anthropologist* 101 (2): 381-384.

Fuller, Steve 1999 "Authorizing Science Studies: Or, Why We Have Never Had Paradigms," *American Anthropologist* 101 (2) : 379-381.

Geertz, Clifford 1973 "Thick Description: Toward an Interpretive Theory of Culture," in his *The Interpretation of Cultures*, Basic Books: 3-30.

—— 1983 ""From the Native's Point of View": On the Nature of Anthropological Understanding," in his *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*, Basic Books: 55-70.

—— 1984 "Distinguished Lecture: Anti Anti-Relativism," *American Anthropologist* 86: 263-278.

—— 2000 *Available Lights*, Princeton University Press.

Harper, Krista M. 2001 "Chernobyl Stories and Anthropological Shock in Hungary," *Anthropological Quarterly* 74 (3) : 114-123.

Ito-Adler, James 1997 "Cultural Relativism," in T. Barfield (ed.), *The Dictionary of Anthropology*, Blackwell: 98.

Keesing, Roger M. 1979 "Linguistic Knowledge and Cultural Knowledge: Some Doubts and Speculations," *American Anthropologist* 81: 14-36.

Levi, Giovanni 1992 "On Microhistory," in P. Burke (ed.), *New Perspectives on Historical Writing*, Pennsylvania State University Press: 93-113.

Long, Norman 1992 "Introduction," in N. Long and A. Long (eds.), *Battlefields of Knowledge: The Interlocking of Theory and Practice in Social Research and Development*, Routledge: 3-15.

Malinowski, Branislaw K. 1922 *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archiperagoes of Melanesian New Guinea*, George Routledge & Sons..

Richards, Paul 1985 *Indigenous Agricultural Revolution: Ecology and Food Production in West Africa*, Hutchinson.

Murray, Stephen O. 1998 *American Sociolinguistics*. John Benjamins Publishing.

Shiva, Vandana 1991 *The Violence of the Green Revolution: Third World Agriculture, Ecology and Politics*, Zed Books.

Sokal, Alan 1996a "Transgressing the Boundaries: Toward a Transformative Hermeneutics of Quantum Gravity," *Social Text* 46/47: 217-252.

—— 1996b "A Physicist Experiments with Cultural Studies," *Lingua Franca* 6(4): 62-64.

—— 1996c "Transgressing the Boundaries: An Afterward," *Dissent* 43(4): 93-99.

—— 1997a "A Plea for Reason, Evidence and Logic," *New Politics* 6(2): 126-129.

—— 1997b "Alan Sokal Replies [to Stanley Aronowitz]," *Dissent* 44(1): 110-111.

—— 1998 "What the Social Text affair does and does not prove," in N. Koertge (ed.) *A House Built on Sand: Exposing Postmodernist Myths about Science*, Oxford University Press: 9-22.

Spiro, Melford 1992 *Anthropological Other or Burmese Brother: Studies in Cultural Analysis*, Transaction.

Terrell, John E. 2001 "Anthropological Knowledge and Scientific Fact," *American Anthropologist* 102(4): 808-817.

Tylor, Edward 1871 *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art and Custom*, vol. 1, John Murray.

Williams, Dee M. 2000 "Representations of Nature on the Mongolian Steppe: An Investigation of Scientific Knowledge Construction,"

American Anthropologist 102(3): 503-519.

【韓国語】

高韓那 (KO, Han Na) 2003「日帝時代の女性喫煙に関する言説分析: 一九二〇~三〇年代を中心に」, ソウル大学校大学院人類学科碩士学位論文.

金光憶 (KIM, Gwang Ŏk) 1998「日帝時代土着知識人の民族文化認識の枠組み」,『比較文化研究』4: 79-120.

金容徳 (KIM, Yong Dŏk) 2002「京城帝国大学(1924-45)の教育と韓国人学生」, フォーラム日本の植民地主義と東アジアの人類学 編『日本の植民地主義と東アジアの人類学(一)』, ソウル大学校比較文化研究所.

キム・ヘギョン (KIM, Hye Gyŏng) 1997「日帝下の子女養育と小人期の形成」, 金晋均・鄭根植 編著『近代主体と植民地の規律権力』: 222-276, 文化科学社.

南根祐 (NAM, Gŭn U) 2002「「実践的」文化民族主義の虚実: 宋錫夏の「朝鮮民俗学」を中心に」, フォーラム日本の植民地主義と東アジアの人類学 編 上掲書.

ヤン・ヒョナ (YANG, Hyŏn A) 1995「韓国家族法に読んだ三つの問題」,『韓国社会史学会論文集』46: 106-140.

林慶澤 (YIM, Gyŏng Taek) 2002「植民統治とアカデミズムの間: 朝鮮総督府嘱託の研究調査活動—今村鞆を中心に—」, フォーラム日本の植民地主義と東アジアの人類学 編 上掲書.

崔錫榮 (CHOI, Sŏk Yŏng) 2001『韓国の近代の博覧会・博物館』, 西京文化社.

Anthropological Dualism and Re-unification of Knowledge: A Theoretical Overview from Korean Studies

OTA Shimpei

How did they link knowledge and culture in past anthropological works? And how can we think of the relationship of knowledge and culture now?

Classical anthropologists used to insisted on monism of knowledge that *primitive* knowledge would be under evolution forward that of West European rationality. After a few foresighted works and structural-functionalism criticized this monism, anthropological mainstream on the basic idea of knowledge has concentrated the dualism which insists on the separation of scientific knowledge and folk knowledge, reflecting the prevalence of cultural relativism at the same time.

Then most of anthropologists have come to face the tide in which they are demanded to devote themselves to folk knowledge studies while it brought the worship of folk knowledge studies also to the other fields of science. On the other hand, studies on scientific knowledge marked a new epoch by the achievements of STS (Science, Technology and Society) studies in limelight, but remarkably most anthropologists keep making light of it for a long time.

Recently, however, some postmodernist works of social cultural analyses in two tendencies seem to substitute monism rather for the dualism of knowledge. One mainly focuses on instrumentalism to declare that anthropological works have made a contribution to social revolution as well as they themselves have remained *fabrication* under a large number of social limitations, while the other regards scientific knowledge which is popularly recognized by the grassroots, as a sort of object to study just like folk knowledge.

I intend a preparatory research for future possibility in this review essay, especially of the latter tendency of this re-unification of knowledge —— that is to say, studies on popular recognition of science —— from the field of contemporary and colonial Korean studies.

Key Words

scientific knowledge, folk knowledge, popular recognition, postmodernism, Korean studies